



培  
 補  
 刻  
 夢  
 園  
 彙  
 正

4 3  
 如  
 469  
 10 止









○持國天王乾達婆  
毗舍闍と星下に踏從  
て東方と守護と  
ふ四天王乃第一方り  
○增長天王鳩槃荼  
薛加多を星下に踏  
從南方と守護と  
は四天王の第二方り  
○廣目天王龍及び富  
單那と星下に守護  
を守護と  
○毘沙門天王夜叉羅  
刹と星下に守護と  
北方と守護と  
悲多聞天王と

○韋駄天の佛法の守  
護神あり魔王佛舎  
利と尊と外と追々  
取返しあり禪家の  
厨小安直と  
○鐘馗の唐の明皇夢  
大臣の南の進士鐘馗  
と厭と天下の虚耗妖孽  
と厭と命して其形と  
圖せし天下に傳と云



持國天王



毘沙門天王



鐘馗

新 韋駄天



辨才天女

○衆生に智恵福

を授け人を導かり  
琵琶と弾したる相  
とありくも妙も

天女ともいふ

福祿壽

○福神方り天童星

とあり星乃化現あり  
顔かぐして杖はよ  
修瓜結とてそり  
務を筆とて又麻瓜  
とてともいふ

大黒天

○八万四千の眷属

あり貧困と轉して  
福者とかんと言  
たまへ摩伽羅神と  
もいふなり

蛭子

○伊弉諾尊の才三

の所子日の神の所  
才西宮蛭子三所殿  
とありあり市乃賣  
買と守りあり神  
なり

辨才天女



福祿壽



大黒天



蛭子





布袋

○支那の散聖の  
て弥勒菩薩化身  
からとり常に布  
の袋に負くのを  
て世人は布袋和尚  
と名はしむる

寿老人

○福神の老人星と  
して星に現れる白  
髪をく帽をひく  
を杖をとりて麻と  
を

布袋

寿老



○伏羲氏唐土の帝王

大聖人なり此人生れ始  
て網罟を修く捕漁を  
民小教あり又畫八卦  
恐歎と造たまふ

○神農氏同帝にして

聖人なり民に五穀を  
事以教へ又市を  
交易の利を於て  
帝草木の味を寒温  
平熱の性を探り人身  
の病と瘵を事と教  
め此より醫道なる

新 神農

新 伏羲





○倉頡ハ黄帝代  
 の人あり眼四つあり鳥  
 乃足跡を以て文字  
 文字と作らば是文字の  
 祖なり

○黄帝ハ軒轅氏とフ  
 蚩尤とハ逆らハ亡  
 帝位ハ即クハ聖人也  
 此時より曆算律呂  
 宮室書契冠服等こ  
 とく興ス又舟車  
 と作ラシメ命  
 志ク蠶桑業と教メ



○孔子ハ唐去周代の人  
 堯舜の道弘ム五常  
 と教メ文宣王ともハ  
 儒家の大聖人なり

○老子ハ周の代  
 の史あり生を以テ  
 賢なり道經五千言  
 著シ其の自然の道  
 教メ道士の大祖神  
 人なり其終を忘ラズ

○許由ハ堯帝位と讓  
 ラんとシ之を聞テ其耳  
 汚ス之を洗フ顔川の滝  
 下ニ耳と洗フ賢人ナリ





○維摩居士ともり  
 くに拂子に持方丈  
 の円小八方の師子に坐  
 とりて語りてふれ大衆を  
 入て法門とせし多し  
 ○山越の弥陀に比叡の  
 横川の峯河弥陀佛  
 の容儀現れどもいと  
 惠心僧都おそめて  
 写しぬひりくくや  
 ○聖徳太子の全世三代  
 用明天皇の皇子なり  
 世に代推古天皇に所宇  
 務政を日本佛法の  
 祖なり守屋とて一掃  
 天皇寺と建立をなす

○出山の釋迦の如來  
 十七歳少て出家一  
 三十歳の所時十二月八  
 日明星の出ると此麻  
 然大悟とあり正覺  
 を成るなり  
 ○誕生佛の釋迦如來  
 卯月八日寅の刻に誕  
 生しぬひ七歩の如  
 歩を乃た右にのりて  
 上天下唯我獨尊と  
 のことありとる入滅と  
 二月十八日なり





○初祖達磨の梁乃武帝にまゝに臥臥して  
 つまむ魏の少林寺に入  
 りて九年坐して九年達  
 磨とも又二華乃達  
 磨とも又二華乃達  
 磨とも又二華乃達  
 ○不動明王のまゝ  
 利剣と持たふ搏の繩  
 と持たふ衆生の心悪  
 をいさすのあへんを  
 后の空の動せぬ  
 かち又九人の怨れを  
 わし示しあふあふ



不動明王

達磨尊者

○龍猛菩薩の南天竺  
 に出生釈尊より八百の  
 後あり真言宗の  
 祖方り大日如来の  
 續悉地經弘めぬ  
 ○善導大師の唐玄奘  
 安の教より出現あり  
 三十余年少も睡眠せ  
 ど唐永隆二年三月十四  
 日遷化  
 ○天台大師の陳隋二代  
 の國師唐主天台宗の祖  
 祖十一月廿四日二十歳にて  
 入滅智者大師ともいふ



龍猛

善導大師

天台大師



○六祖大師の唐土ありて  
 達磨より六祖諱を  
 惠能此下を禪宗五  
 家にいふ大鑑禪師の  
 名を号あり  
 ○傳教大師の寂證も  
 〇日牟天台の阿祖あり  
 延暦十一年に入唐五十六  
 歳六月四日入滅  
 ○役行者の後小角も  
 〇和忍の人葛城山に入  
 て孔雀明王の法を約ひ  
 後小母以録して入唐一  
 たす

○寒山子初名拾得の人  
 天台のふ湯をく常に  
 に拾得と法をいふ後  
 玄奘の法をく文殊乃  
 化身なりといふ  
 ○拾得豊干禪師乃  
 道のつらふ拾得  
 をもつて拾得といふ  
 寒山といふつらふの終  
 とよまふなり  
 ○巨靈人の大力神通  
 を得たる人ありて  
 磬の力あり常に白虎  
 を乗る





○費長房の後漢の代  
の人ひる仙術とすか  
びゆく白鶴にのりて  
赤甲と飛ゆ一あまひ  
さる仙人あり

○琴高の神伝の術  
夢みて其功なり大い  
かゝる難に素して水工  
狐飛ゆ一書をよま  
於びる仙人ありと  
す

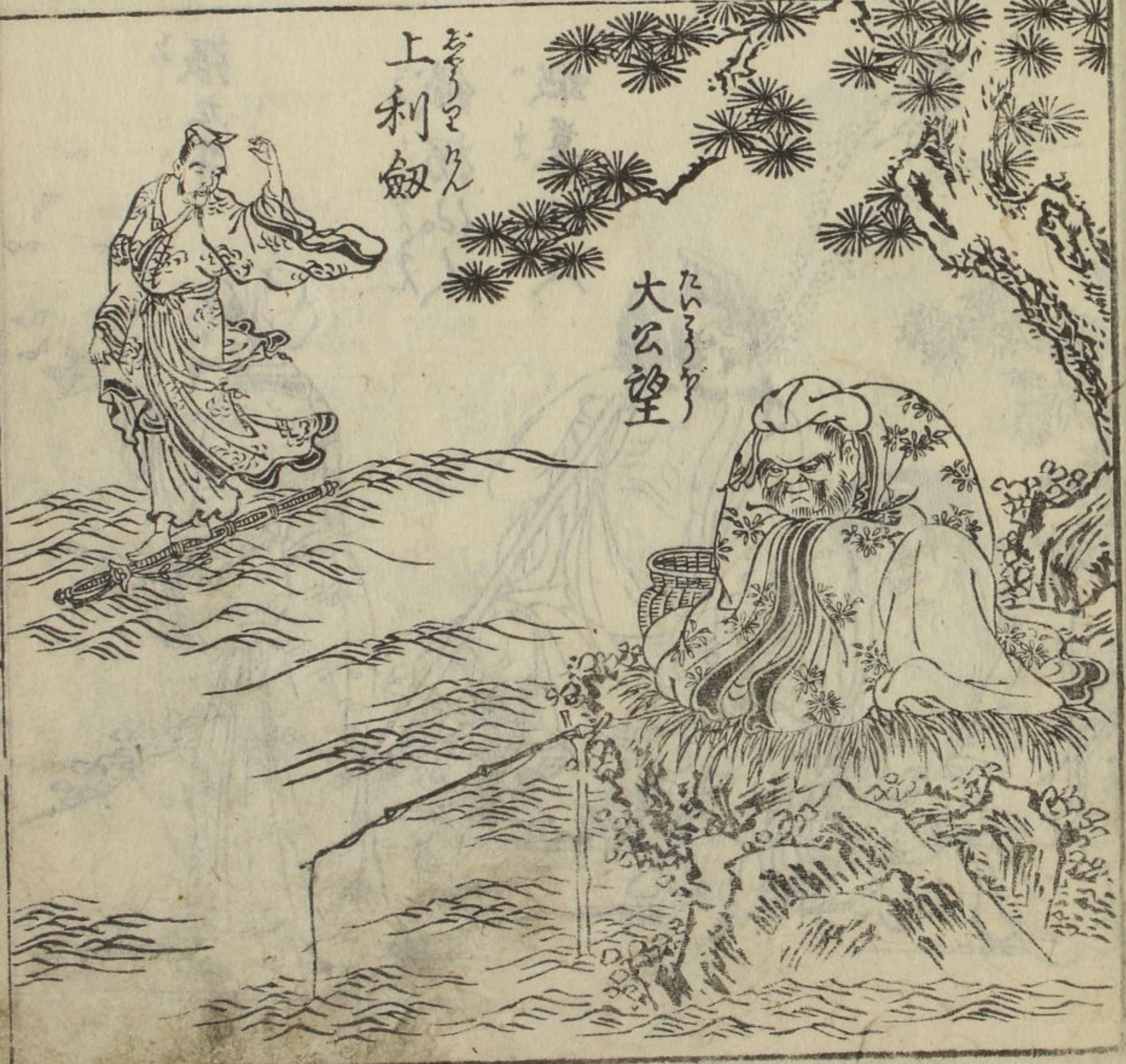


琴高

費長房

○大公望の尚父とも之  
を渭濱に釣して樂  
そする強きあう後小  
八十余歳ふ及で周乃  
支王その賢とありあひ  
師とあひ同武王に兵  
と教田氏の討王狐  
亡しあふ

○上利劔の劔と素と  
して大海の波とて飛  
ゆる劔狐ゆると  
あふ



上利劔

大公望



○張九哥の宋時代は都  
居し冬月は草の  
三つがり帝わやそ  
召て酒飲ふ日  
紙と様のころに  
又招くそえの紙  
○鐵拐仙人の虚空に  
ひろくこころを  
ふたつと細と  
○蝦蟇仙人のほの  
其の

○西王母の仙女を  
前漢の武帝に桃を  
なり味甚なり帝  
核と植んと有る五  
母の曰此桃三子  
花咲実のつ食と  
つと東方朝は桃三  
ぬと食せり  
○通玄の張果も  
と物と御瓜なり  
仙人なり



張九哥

鐵拐仙人

蝦蟇仙人



西王母

通玄



○天人の首の花曼  
 志がひとく好後  
 け旅つうどほのま  
 たれせととや後  
 とも命終るとま  
 樂つとて五裏乃  
 かかすあり  
 ○如陵頻の天上の  
 鳥なり天人の面の  
 おくををきて  
 英くしとく妙  
 声鳥又好音鳥と  
 もつり曼佛経乃  
 前なり



○和分の此園の風俗  
 志三十一字はかとう  
 祢々瓜猪うて情瓜  
 述ふる事実とて  
 を故に佛神も感應  
 有るの徳わりのあ  
 そと和分の神代より  
 始る人も任右大ぬ  
 神とあの中神とあめ  
 なり夜通姫人磨赤  
 人とあの前神とと  
 う後、後成定家  
 隆のでた人教多在  
 て秀分なり





○詩ハ唐去りりかま  
已故唐方より  
詩ハ和方には  
義わり五言七言  
五字七字に作  
と律とありよく  
賦述て人々を感  
め實とありと事  
詩ハ  
のニッふちり  
白居易の  
天賦の詩人なり  
蘇軾字子瞻東坡  
と号以家の人  
なり



○筆道ハ唐まの文字  
かり漢字とく晋  
王羲之筆法の祖  
石面小書とま  
牙づりま  
日本にて  
弘法大師  
三筆とて  
仍成と  
も筆力  
に残  
るる  
乃  
て今





○琴の伏羲の作り始  
あり五十弦又正八弦あり  
琴の八案器を用を  
和琴といふ又世に  
十三弦の琴をほく  
琴といふ言曲ありと  
多くあり

○香の清浄潔白の徳  
あり物ふく襟とさ  
故小袿系仏おいて焼  
かるとその香遠ま  
伽藍の水に入れてま  
よくと沉香といふ香  
よくきこる



○鞠の唐女嬭氏の  
代に逆臣虫元といふ  
者謀叛と企軍に及  
ぶ女嬭子の女帝さ  
ら聖徳のといふ民な  
びき後ひ終ふ虫を  
討亡しあひ其頭と  
孫より諸人虫を悪  
きて頭と蹴りうは鞠  
の始なり鞠のころ  
松相柳搦の字と植  
りかり飛鳥井家雅波  
家鞠のは家方り上が  
後法家松下一流あり





○目利の書跡古画又  
 万の器の真贋とよく  
 見分る人といふ古来  
 とも名分劍の目利の  
 本流はとて其家あり  
 ○算術の方法はいろ  
 貴賤とろふなてり  
 いろ事あり天地五運  
 乃の乃も算教と伝く  
 考ふも六万里の教と知  
 る事も皆算術の術  
 とりてくと人同日用  
 算術の多減わけの  
 なる

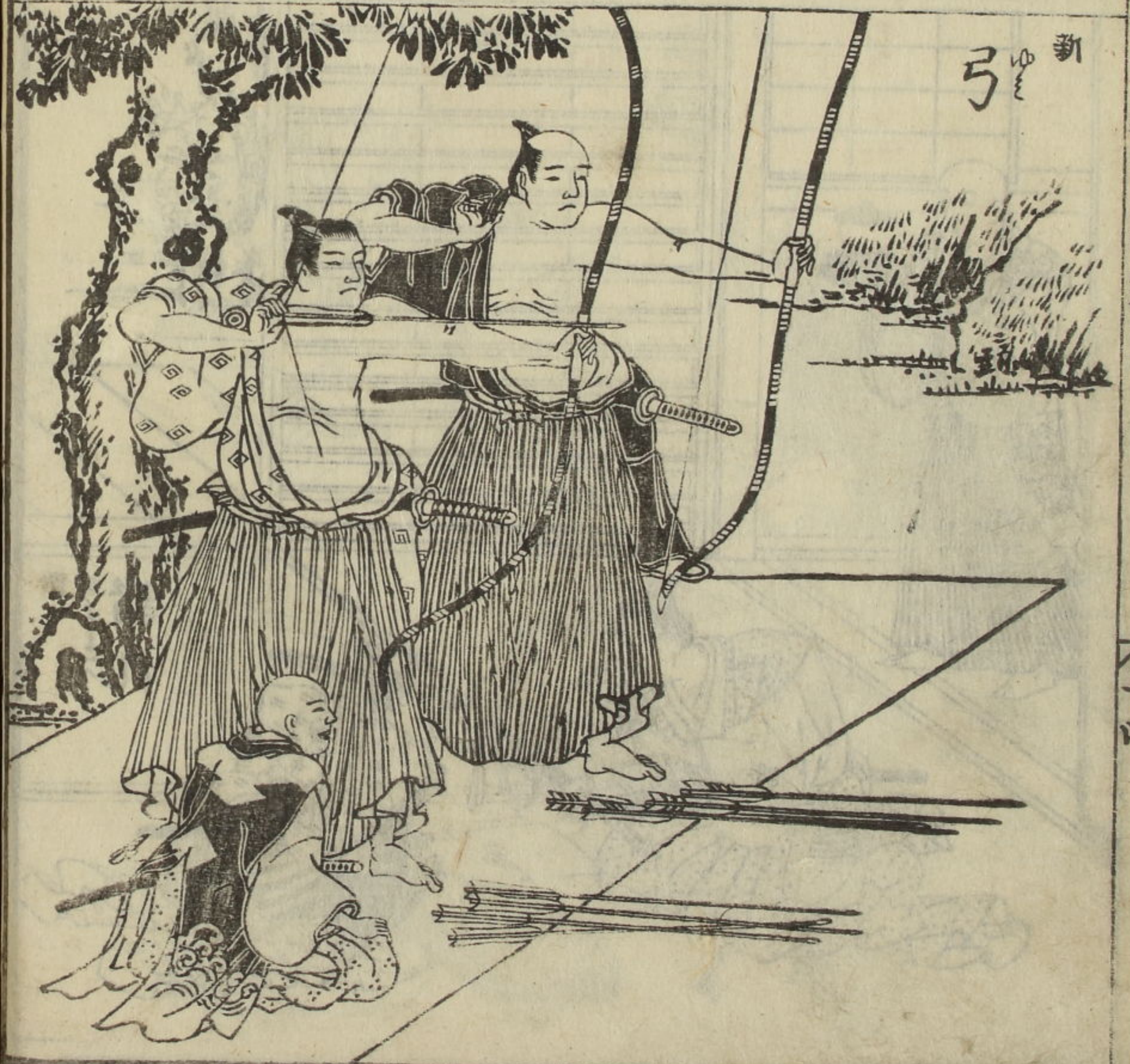


○諸礼の儀のまじり  
 にかつて礼なてりか  
 ざり事なりを重んず人乃  
 教の六藝といふ礼  
 樂射御書教の中  
 にも礼と重んずるこの  
 國に礼儀の作法は將  
 軍義法公の由代より始  
 まりてと小笠原家の  
 諸礼といふ又秩方とも  
 つは仕官の人勿論の  
 事貴人ふまてり人  
 はあつてのあつたな  
 まはるべき事也





○弓の射法といふ武  
 士の家にはくく人の射  
 法と學をいふのあり  
 らむ武士は弓の執り  
 つのあり唐土に揚由  
 基とキ弓の達人は百  
 歩下りて柳の葉に  
 射に一葉も射せん  
 事なりとて我朝ふ  
 おわく鎮西為朝統  
 登守教経の須與市  
 等弓の達人なり其  
 外教多精兵の射て  
 わるしなり



新 弓

○馬の乗馬の法を  
 是武士の要なり其を  
 師傳へて習ふべき  
 と肝要なり切なる  
 者ふよるて後る  
 わく曲ゆりなり其  
 百曲ありとて約の  
 つま曲の並しや法  
 のつくりしりし八  
 海あり今世大將の  
 と者にりりひて武  
 要乃とてその演  
 たやとくより大に  
 も先を後るの徳也



新 馬



○ 劔術はる刀あり  
 法かるて兵法とも  
 一の武士才一の乃也  
 依儀の事このり林  
 乃流柳生海津新  
 海一刀海かこさるく  
 有併未幾の藝と  
 新身の先とさる  
 づる人師あり  
 師さき事いわけと  
 今釋盜乃河代  
 かわくの高家職人  
 農人等いさる  
 とするべし



新 劔術

○ 圍碁の周公且修り  
 ありと云者倭大居入  
 庵の時修其といふ三百  
 六十日へ年月日教へ五  
 日星の九曜の星石乃  
 黒白の昼夜と表と裏  
 ありしと

○ 将棋の周の武帝は  
 下五廢に命ぞく修り  
 志軍法の儀とてこと  
 三一のあり大將棋中  
 将棋わり今もそのと  
 ぶ瓜小將棋といふと  
 よりありいわけあり



新 圍碁

将棋



○茶湯のひびくこと  
 わの幸なまをいも茶  
 亭瓜敷茶屋と号し  
 草木の植や料理茶  
 いりまては式とま  
 ころしくかりん千  
 利休よりくはまきり  
 古田鐵初小堀遠及  
 と茶乃の主人其流  
 品より人傳れま  
 行儀とちの二助多  
 元来茶乃の茶と  
 ふた級茶瓜のこ  
 る瓜本をことと



新茶湯

○立花の京六南堂  
 の別當池坊立花の宗  
 匠方り毎の七月七日  
 に門牙集集して立  
 る花枝を瓜の角を  
 又拋入の飾り師  
 わり今世かけ入る  
 おこりまてく花の舎  
 多し一宜かりめ花  
 い人の瓜瓜くは先  
 替氣とさんごりの  
 かなきよんごさく  
 き枝のりそわとびと  
 めりまことありせり



立花



○山伏と修験道とも  
 つま真言の法ありゆを  
 修一 母をこころと云ふ  
 山伏へのやりて修験  
 多とありあふ天交易  
 学んずかびて法ん乃  
 五運八卦と云ひを修  
 若ぬ病の程重たむ乃  
 方ぐ修験考ふまこ  
 一流後修者の法修  
 そりものわんを修験者  
 のせんをよめる人の病を  
 修験と修験場ありも  
 修者なりといふ



○鷹の唐土五帝の時  
 よろと賞せんととて我  
 朝ふりてりし神功  
 皇后の沛代小百派  
 関より始る修験を  
 其後に徳天皇乃  
 沛代唐より修験  
 献せりし神功と修  
 是備る修験と云ふた  
 まふ是修験のい  
 りあり修験の勇氣と  
 かんにりし修験乃鳥  
 かなむ修門小賞と  
 あり修験あり



新編海防通商図説巻之十一



○然いひくよりあり  
 事あまども其傳じ  
 のありと後小松院乃  
 希守に祝世世の存を  
 つく者公方家の徳を  
 まあくゆらん歌の後  
 に今も保生金剛とあり  
 て江戸といふり又猿楽  
 といふ事ハ猿田氏の傳  
 傳のいひありとくや謡の  
 日本に傳の傳一ありて  
 神祇祝教を云常故  
 事世の流すく巻集  
 じよりのあり



○笛小鼓大鼓を鼓  
 是と拍子といひあり  
 笛は武蔵の村紅仲伝る  
 とくや鼓ハ秦の積玉の  
 伝あり大鼓ハ湯あり  
 另有り小鼓ハ法に  
 律方りあま陰陽和  
 合の意あり又を鼓ハ  
 黄帝の時獲と熟し  
 其皮とをて作り  
 とくや或ハ云黃帝  
 をとくかの女帝  
 のとくんに黃牛の鼓  
 と作りとく





○狂言のそのまじり  
 はまびらうあはれのふ  
 乃る人入るまの氣分  
 頼とて笑せりいふと  
 危れとあかきべし能と  
 日とく流義のさうら  
 わりくかしのうらうら  
 又ね云のしらに傳授  
 とさるりのありとま  
 ね云のたまね戯と  
 おとて人のみかき  
 りめつひとあまの  
 を要とさるりのあり  
 とら



狂言

○浄苗理を小型お通  
 小娘も海川伝長公の  
 侍女まこと氣分矢作  
 浄苗理女がまこと他家  
 忠永松授やと付く  
 是を浄苗理といふる  
 其は浄苗理と波角の兩  
 松授と縁に合せて曲  
 節とめり又其衣の以  
 ち浄苗理をまの更紙  
 といふとくま下やう  
 京大板にた浄苗理  
 ちまのうらうらてあか  
 流義出ませり



浄苗理  
右丈



○三弦の元来琉球  
 國の樂器なりけり  
 三味線とも書ゆり  
 近世諸國より此三  
 弦とりてあまふ事  
 かり心嬌まればれ  
 ども親子にかわく外  
 由りなきなりけり  
 月夜の樂その余乃  
 花舞いづき三弦とりて  
 一曲おもふと又小弓と  
 りふりの三弦を伴ひ  
 出せりものまづ



○芝居の真おころ  
 河原の芝にござゆを  
 をおわしてねまを  
 かしたるものおて今  
 教下りたるはし教  
 のおかりし次光に  
 工みかりく夜願お  
 中をも花火と並して  
 立役女秋歌彼か  
 とましくに後まけて  
 三ヶの津に常芝  
 とゆるらき諸人の教  
 とりかりぬるく芝居  
 とおらゆゆりぬ





○人形芝居のやつら  
 ともいふものなりともいふる  
 人形狐系はくはる  
 つらひし事あり  
 功者あきて今月由  
 んとくきとゆと事生  
 めりかてり、雅波行か  
 豊作のあまきと  
 とよひのきとありふ  
 雅波み竹田といひ  
 人形の芝居あり  
 ちき細工とかりて人の  
 月狐といふとやとの  
 かり



○軽業いひくく其  
 傳わり事あり始とち  
 ともいふ合ひ様のも  
 ぼく上ひのきとあり  
 人の目候ふゆとあり  
 ともいふやとあり  
 雅我といふかとのあり  
 きとありとあり  
 一つつとあり  
 ともいふとあり  
 世傳といふとあり  
 雅のつとあり  
 かり



軽業



○ 梓木の祖堂也上人ありて東也也其の心に住居して茶をなげつり他業をも十二月十三日を京町中と賣りてく正月大なる茶をなめては例として求る事あり

○ 麻呂の事 福といふは毎年長麻呂大明神其の古西人の身の上五穀の苦思等神託の瓜備國人福をいふものあり



鹿嶋事觸

鉢敲

○ 猿のゆりたてかりし今も猿の身は伏見の名なりゆりし年乃ゆりし所方へ嘉例としてよるめできた事と云ふは又田舎にて牛馬と飼ふ秋入の時分きしものゝれにて猿ちひし其ぬい猿は又と稱するものなりゆりありあいのしおらまにん人なり



猿舞

町書神言はるは日長巻十一



○万歳楽の年のはじめ  
 めてした例とてりおへ  
 て祝ひまゝありけり  
 ちりも有る事ありけり  
 聖徳太子の所時に鳥  
 帽を被る事とてりあり  
 一、ゆめりて今に鳥  
 羽子素直と云ふこと  
 けり初めは天和の  
 ちり農人ありけりや  
 師と万歳といふ中  
 へ入法より出東國へ  
 三河のふしりもつと  
 り



夫宮室衣冠動植飛沉凡百器用以  
 文字寫貌其狀身苦搜力索若得至  
 彷彿求之圖繪則一目瞭然思已過  
 半矣故古人之講學必也右書左圖  
 圖書並稱取從來尚矣惕齋先生所  
 著圖彙至意所屬蓋亦在乎此其書  
 奚翅訓導童蒙云爾雖宿儒老學亦  
 有資以廣致格之識家珍人藏良有



以茲從寬文逮今殆百幾十年版已  
就剝缺今茲寬政已酉額田氏主人  
囑下河邊氏移寫舊樣再剝刷而  
精工緝密視舊有倍焉刻成請余以  
一語余謂近有春朝齋山域名所圖  
會亦以圖繪之故盛行乎世朝摺暮  
印洛陽帛貴彼實不過一卧遊之具  
而已殆且見賞如斯况之大有益之  
書非徒供於目翫也則必與彼並馳  
而超乘過此如指諸掌余預為額田  
翁化賀翁至記而驗之

己酉四月

春莊端隆





寛政元年己酉三月吉辰 出来

皇都 北白林 九臯堂 壽梓

訓蒙圖彙 大本 全八冊

同本小本 全四冊

同増補頭書 全八冊

同増補頭書大成 全十冊

寛政元年出来  
下河邊拾水子画圖

同増補頭書大成拾遺 全五冊  
副出

三才千字文 訓蒙系此目錄と初巻の表  
横切して巻の裏中に綴り

村上勘兵衛  
出雲寺文治郎  
今井七良兵衛  
額田正三郎  
勝村治右衛門  
泉 右兵衛  
小川 左兵衛  
小川 源兵衛  
谷口 勘三郎



